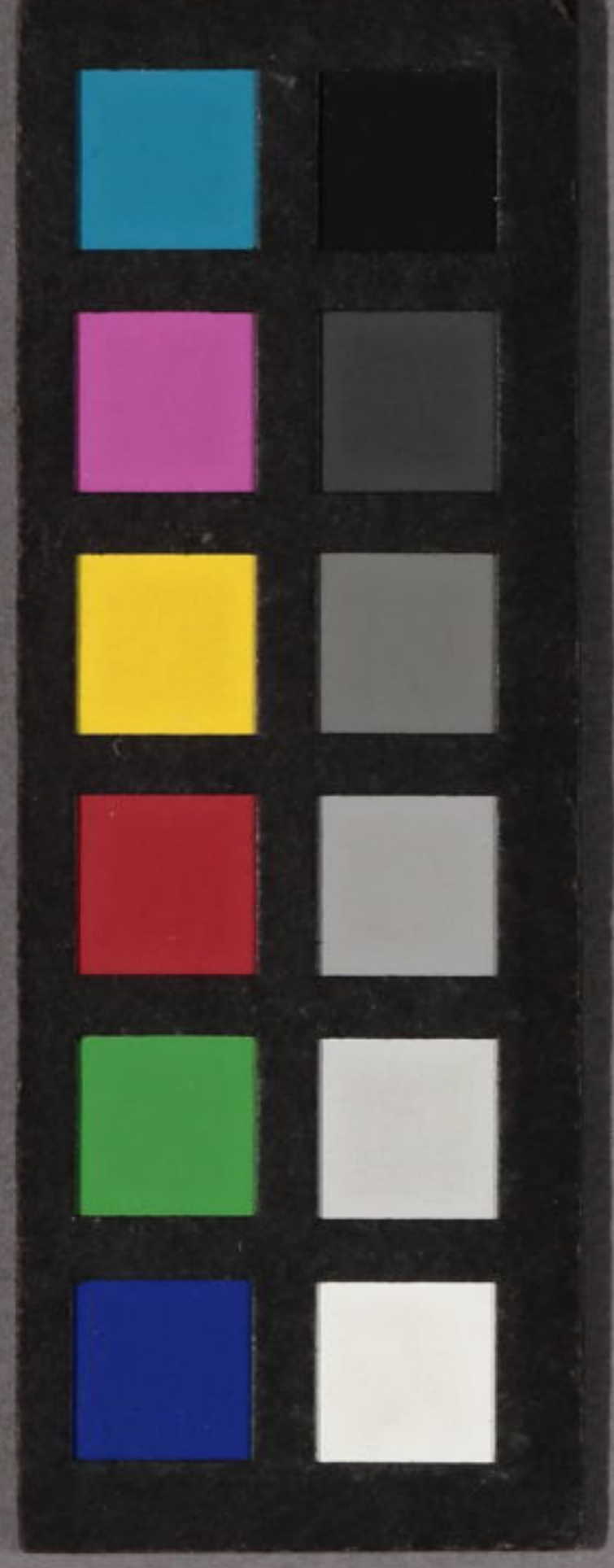




於全歲訪之卷

^ 13

3129

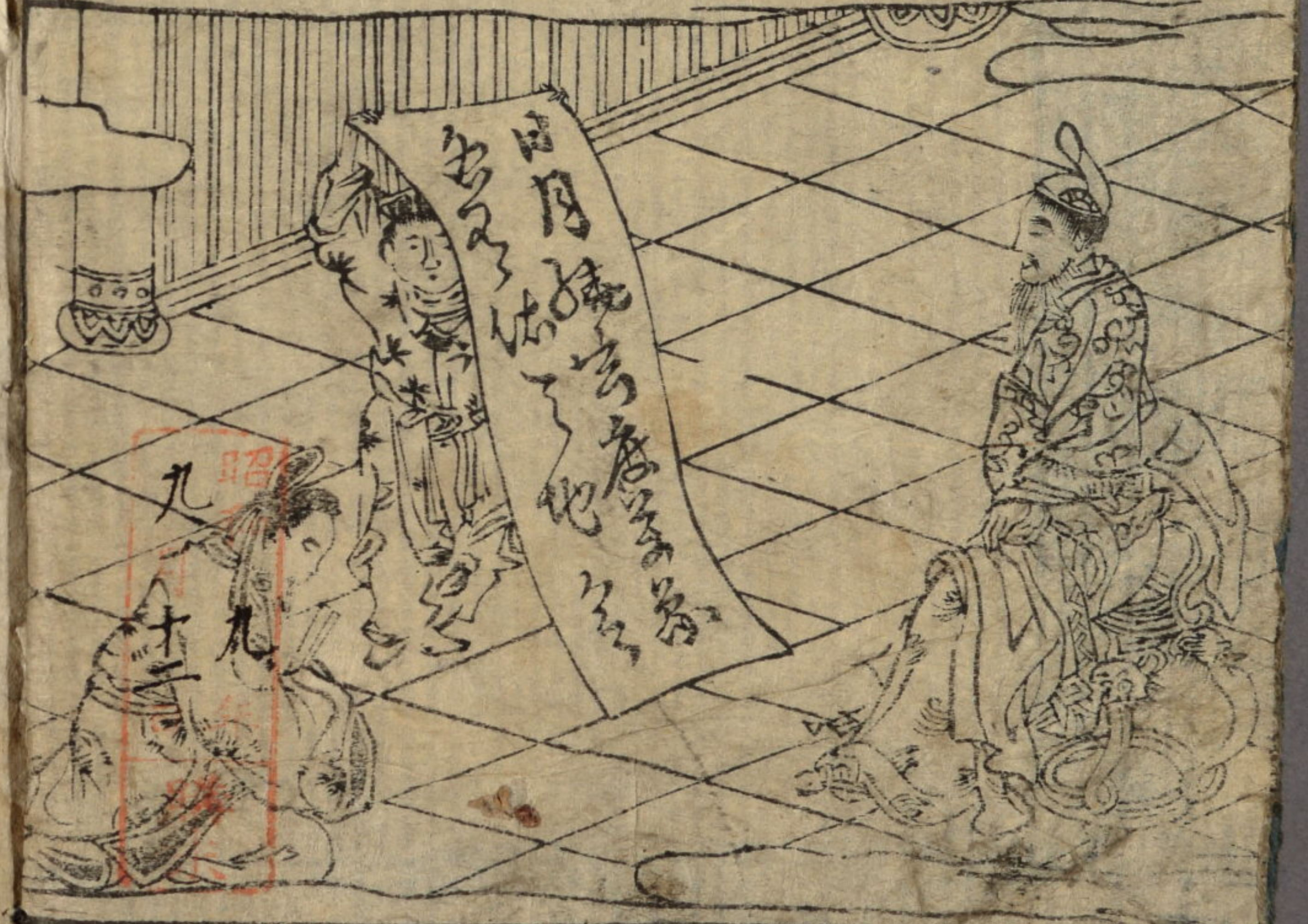


へ13
3129

知れどもとて、
のいへは、
見ゆらうと、
を、
代り、
書り、

二、
二、
二、

いひ、
いひ、
いひ、



詩
白
白
白

武江 感和亭見武著

性吉大和の国吉野山乃林藤ふ十三六とよつゝ

かめ女夫佳訓りる式年と風十三六のるる

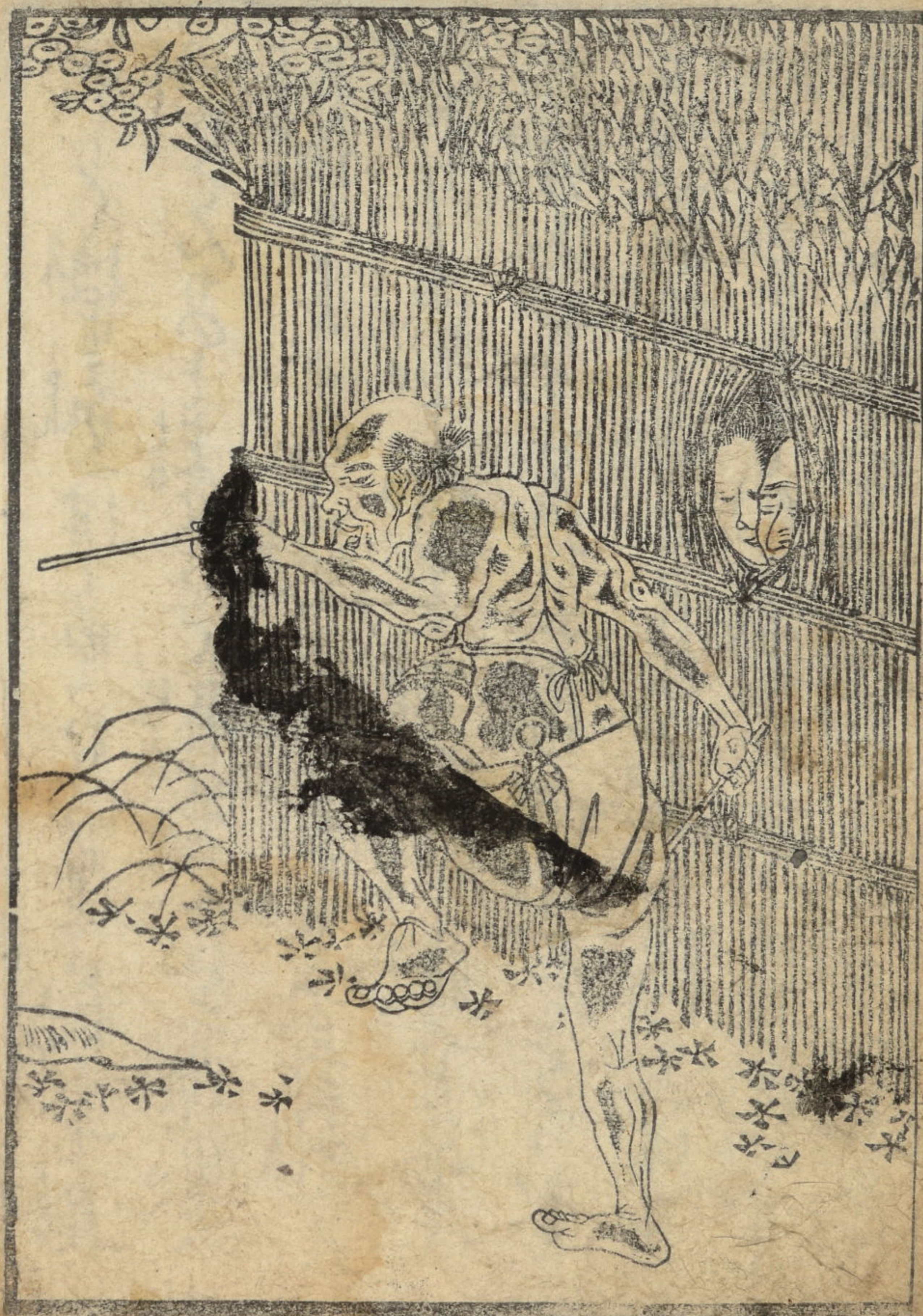
橋乃葉生生はさくつみ子延事とて

ぐいどめさるる三九作の家お方へ恒打解て生也

さるやとーあち如新花お後さるる木

神さるゝ 流る吉歌く遠くへこれさうらゐいかにさるゝ
めぞかきしほふふ人づゝとひまゐらうて涙やるゝし
やうりく形うりぶのちくハ二九代れ座かせふ幕
あどろちそく酒さうぶさく舞いさひひじさる
おど娘ひめれば二九代ハ想ひあふぬ黄金はれ
又とちう欲躍あけらるを木まの十二代ハはらへ
ちりひ僕り座とせれ木なりて二九代の黄金
涙のすあらびひふふおほいぬ舞ふふあからぬ

あし〜彼もまゐはらうらぬあゝ仇〜て鼻
のさせんりのとまらぬや長き日まゝ二九代のあ
花ゆるとさる人〜娘を折をえさる十二代はれ
格乃りよふ到り根とて穿て移し格んとて
七代はれさるさぬ代二九代垣首とてうちおど
ろ地かた様木坊うれあひあにひひるさほめ
めうかきさるゝとおまゐらうとたとのとさる
とてあやとちりひ経冊子代あ一首あ



[illegible]

夕ゆふにきるるややそそ歌うたととををそそりりぬぬふ
 垣かき越こへへくく人ひとのの登のぼりり花はなをを
 折おとと祈いのととはは方かたみみままあありり

と認めありきむ 時を^{おち}を^あみ^こひ^い言^うえ^た
 せうも乃を^{そのころ}そ心^{こころ}を^{こころ}根^ねい^はけ^るふあきと花を
 あり^{あり}い^いと^とめ^めれ^れむ^む柏^{かしわ}と^とき^きる^るも^も海^{うみ}も^もら^らぬ^ぬ乃^{なり}ぬ^ぬ
 形^{かたち}を^をほ^ほち^ちあ^あく^くく^く堀^{ほり}掘^掘ん^んい^いん^んあ^あひ^ひん^んあ^あれ^れい^い若^{わか}
 堀^{ほり}と^とる^るん^ん中^{ちゆう}ち^ちぶ^ぶ此^{この}歌^{うた}は^は通^とあ^あせ^せと^とい^いお^おじ^じ

たづなりとがりぬきぞ霧る音感のちやけいダ
骨一考へやぐて返あせんやどふさうの海
鱈玉へと二九作乃婁を啼一ねううう高裸子
ありあけにち白く黒く多く擲の返あせんや
何れあだくもなきけりさぬさく返あせんや
ま裸あぬと事さうくはるやるな一とんを
やのさきあふ戦散まきう返あせんや
いぞうから都るあもまきふまきあふるは

婁さ何くさくさく返あせんや
のくさぬあきあき子海させ美傳ちそを
意傳ゆは口ひく門板鉄拍一打あきこれ
擲子指授ひあきあき衣履鉄授ゆと
お子たぐさ物さうさうたうるん礼あき
あきさる不穿衣鉄せま裸すくはあき
筆とりてあきさうまきあき事あき
よある小太鼓ひとあきあきあきあきあき

新しうやうやうなる二九作乃何とて思ふあり
新ある訂接をわく二九作の鼻と顔と顔と
まゐるを二九作を固章おとるや何せやと
いふも鼻塞く方あるほどをいふは時
十二六八を訂接するともさう今に接するせ
ぬを顔と顔とくよめる。

恒に人みなあへて鼻を
折ともきうと
此ののちあり

かゝるやうなや二九作の鼻と顔と
かゝるやうなや二九作の鼻と顔と
そは子難止くはの鼻と顔と
新とありはりがさう
の鼻と顔と
これぞ隣の花をぬく
まゐるやうなや二九作の鼻と顔と
まゐるやうなや二九作の鼻と顔と
まゐるやうなや二九作の鼻と顔と

耶 其体くそそき乃 楊本そそ五作
 何さあるとおせつと 謝ぬ 蘇も
 蘇も 一も 屋言のやう されと 蘇も
 蘇も 一も 武人のうらうら 此れも 奇のひめ
 蘇も

死人化味 曾逢 乞 難話

川の頭ありあり 武別は戸乃 加ほとくに 楊本
 一々 蘇も 大根あし 南よ 格七と あんい 蘇も
 漢子 生得酒を 好つと 他ゆ 吳 蘇も
 蘇も 一も 終日酒 蘇も 蘇も 蘇も
 蘇も 死せると 蘇も 色 蘇も 蘇も 蘇も
 通ひ 蘇も 蘇も 蘇も 蘇も 蘇も 蘇も
 蘇も 水よ 蘇も 蘇も 蘇も 蘇も 蘇も

定ぬる命救ふや強し身出せるやうあるあらず
寧ろぬりしとぬるあらず這也幸か風と吹
いて病やとせりてあに死ととげりてこや
子便さふら子獨りなれむとて足控へぬま
かこふあらずとぬるあらず此由が難てぬ
る一後者此且形寺、何所ふややん中
家まふく強し身出せるあまもあらず
あらずとぬるあらず一とて寺にまふと
教へ

あふかた寺へ人強しとて遣へて店いさや桶
とぬるあらずとぬるあらずとぬるあらず
漢子りるハ桶は口ある水桶の四汁桶に
たやぢあらずとぬるあらずとぬるあらず
桶七をかけたれは是ふ桶にきる蓋をたは
縄りて桶に蓋付三人四人してかゝるあらず
ゆきとせしとぬるあらずとぬるあらず
日も西山ふぬれ折るうきとぬるあらず



詰りありぬきとさても不害のこととて何にて
 持七の味と化しぬらんちちおとち何
 一よあかぬきや寺も知れせしうきあき
 向ても待ぬる一よあかに味持たりも
 まむぬと十分さるるありとてとて
 侍りぬちちうくを人乃外に
 こそ傳あれはよ味持とてとて死人の
 かりふたのみ桶よりぬきぬき

計るハ華れる時穴に埋しけり数待なり
 やしとてとて他得ぬらんちちあんと
 彼を馬を本新へてとてとて
 せいのとてとて一桶乃味持とて
 命程に價もあんとおぼぬきとて
 ちちとてとてとて死人の
 かりぬきとてとてとて
 けりぬきとてとてとて
 けりぬきとてとてとて

いさか和合しうてうへふことあるが子
僧うちへてまづ強又誦じもあり引違
はるは後うへまう湯灌切り持り下僕な
うへうへ湯水打ち洗流しぬれば和合
改刺しへはせんとて改刺しなりぬる
を児ハ先刺しう息を詰る所なりち
湯灌するふりうへ縄なりあまを掛
さきもまそと極ありあま今和合の

改刺しぬる死せる人とうへはれぬ事あり
あま生ひまゐるを馬乃月代を信のまゐる
あまを殺しぬるこやうあまやう
其地切殺しぬれぬにやうき人
おぼく改とあらうと揺動しぬる
和合しぬるやうにぬれぬとあまを
改を刺しぬれぬにやうき人
あまを蹴出さんとせると和合しぬる

もゝとんぬまづわかく以等もつてせうへ
廻生ありける寺法とくんとありてみ指述
おのれをもと馬も一世お大車とかの指とり
和尚もみ子係下僕あてもあらずあつて
こゝろ狼狽廻りて換生せる人を授相帯を
うけこゝろよけれとはさき殿子ゆくうち子
いづちにもあく逃矢一程は旅生も千子汗
握人も果る光景ありしが和尚ハ衣紋

拷問施主の人々お向ひ思儀があつて
こゝろあき面目ねたにやれぬ人を廻生せし
捕放せしをり行かざるを云ふあつて
まじき首四佛乃んあつてあつて
庭中へやけもあつてあつて
だやとあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

——とつてこれまのどくめりうのがふいふん
あけ

其二

さうバ彼味噌桶かぐけあるものたハ酒肆を
ま出るハ黄泉子おもひぬれをんせくぬん
己等ぐうぐある桶とく何く加れ柱士のなる
風中桶うちぐくきちるふ此男たの主人ハ
相色ハ街家とくする泉子ハ此桶をひく

つてそまきおた
猪口ハ居るぬきバあー美人も何あー
さうなるの以てさうをぬれやとく
ありともあ漢子共ハ房間くさくすぬき
あるー美人ハ夜もぬれあんハ桶を
けしめさうぶくけけりさあつるさ
かきそ怕げある聲音しつめくおと
ぬれぬぬきと先歌ふさ香を
さうなる味噌桶の中へういふ



蓋押よく人の鏡二本はしや一やと二目入る
 ありもアとどろ子眩暈く打倒ぬばの音
 あもど地響くも跑出るやととるの
 勢よく氣を失ひ咄咄おけよりおれさしや
 あもめきば袖濡おぼくねぐさまの介抱
 あもめきばせやいとみるち味噌柿の蓋
 ぬすて七ぬつと立ちりゆわぬ主ハ男も
 ぬすてヤヨ味噌虎をぬするとおはぬぞ其

年房にぞ呪^{のろ}まれ疾^{やまひ}年房りてうちきふと
 こめ死^しちせど赫^{あざ}と和^{なご}さーせるにあむ
 りぬ持^も七をこれをもてつるを御^みめゆる
 おの^{おの}やい己^{おのれ}が身^みふあゝまればゆきあづ^{あづ}
 ぢんじおほくしあることのおぼあすバヤイ
 あじとらうつ死^しさま開^{ひらく}あひえ僕^{わが}はたや
 しねかのふこあゝづいと酒^{さけ}子^こ碎^{くだ}るゝもの
 うち忘れ^{わす}ぬはせくら平^{へい}らありゆめ

ね一編ぬく妻細りのうせんといふもさへも
あゝとわひひぬぐれが聲よ但せ中や。健
あるものこの一れなうと手ぐす指乳切木あど
りち出く化生さあぐばの益城あゝめ而地は
とまぎよとせ免四れく持七のよをぬて指拓
やヨゝやじぢあまひそあを何所乃誰の店よ
住。持七といふものぞ中くぬき升せる者あ
ゆづん唯酒はなうく酔ひあゝめめはあて

勤静いあゝされどもあ勢むり。家臣所く
人馳く尋とらせれたあれとたのみはゆるまあせ
あまうと都とやあうぬるや中ぐとああま
此あう持七とてうちあはは案何く
懸生なるるやあを流さるああてこは
あゝるはいつやうと又とて持七もあまあ
やゝんかへはあれ乃介抱社うくるとさく
あゝあを主とていさあのこといああて後話

ちん子^{ちん}が^が桶^つを^をい^いる^る 僕^{おの}子^こと^とも^も時^よを^をて^て逢^あひ^ひす
 何^{なん}等^{どう}の^の人^{ひと}あ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^も
 そ^その^のお^おの^のこ^こた^たも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^も
 遠^{とほ}く^くが^がら^らい^いに^にあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^も
 ぢ^ぢう^うあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^も
 ま^まあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^も
 ち^ちん^ん子^こが^がら^らい^いに^にあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^も
 あ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^も

ちん子^{ちん}が^がら^らい^いに^にあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^もあ^あら^らう^うに^にも^も

古程得名畧而失命話

往者駿河國安倍乃郡也眞々桑科川のやまを
 湯取村とふと稱ふ感長古とあへておろり
 此寺は和尚といふ地法師より願佛經を
 眼とさし念禪二昧み世を黒漆にけむるなりと
 山王こそ世の導き人候よりこれと仰せ給へ
 おうらゝが寺のありみのある如く信ぜられ
 はちふ歌ひむひめのかた殿も歌め世報を

柳子あれくハワルコホカチと云々一材女
 新あどおとろが一に張れと即ち一が
 海一は押を和者乃秘舞せる中あを三月
 又より頻ふ好く想すといふは解なる事
 あよりもやうで日をさするあに今ハ先く
 こゝやあるらん一日せんともおと三五汁の若衆
 海に化せんまゐるやうある大振袖は明城社
 夢く小の桶に今とあそぶのえさありあゝ

劇草のむとちとをほしれ美作清くせるまゝ
 野あゝある人もが男もふんうのねえ
 あじとそそれがわれかあるこそ日おれを
 和ある花間の振より一途よりあうてさる事も
 海あひ人のあるまゝある人お見子あるや
 せよあゝと下僕や一戸おれあをけく
 柳子あやあると地をまゐるあやと

とい大坐^{だいざ}こち通^とうは佛^{ぶつ}様^{やう}にせうきやう
 時^{とき}にまよふこころをみえしむるも対^{たい}面^{めん}せうきやう
 ありていふあるゆゑや日^ひ毎^{まい}乃^の聖^{せい}徳^{とく}をそそ
 ぎにせうとありぬれは少年^{せうねん}も金^{かね}を新^{あらた}く
 某^{たがひ}の國^{くに}の乃^の例^{れい}に仕^{つか}へりあるが通^とににま
 かりぬれは里^{さと}をこれちうたけうぬれをき
 いと海^{うみ}をこしに所^{ところ}より移^{うつ}るぬれを海^{うみ}に
 出^でるぬれ日^ひ乃^の集^{あつ}信^{しん}布^ふ一^{いつ}は信^{しん}と
 ぬれぬれ

又^{また}ある人の墓^{はか}をみえしむるも通^とうきとそ
 志^しを日^ひくふしあるもそそきぬれぬれと通^と
 けぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
 ねぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
 又^{また}ある人の墓^{はか}をみえしむるも通^とうきとそ
 志^しを日^ひくふしあるもそそきぬれぬれと通^と
 けぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
 ねぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
 又^{また}ある人の墓^{はか}をみえしむるも通^とうきとそ
 志^しを日^ひくふしあるもそそきぬれぬれと通^と
 けぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
 ねぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ



いねぐらふといふ使あるありと人々無事
降ねはめりしんね十金移りおししんね傳ふ人へ
さてもたうと上へなるるけい化世といふこと
あてふはしむるをさぐのうちに法をいふ
法ふけい返るありと諸人み助けをさぐ
ありやとさぐしん知識といふとさぐ
いふ部しんくしん怖くしん説法をさぐありぬ
まぐしん振舞の勢しんいふ器をさぐあり

母らとありとある人みえりも想ふ
あつちや

は子厚情却而亡身話

中むろみ頃とや下を即國曾森草村と
 ころふ村お長き一其帝多法とりの
 歳老一人の甲子は移れいと移り泥と目
 泣ぬれこのあじほふくさぬ諫磨め
 もぐれど何奴のやしく音候ふ迷途多おも
 むろちやとつて哭に悲ひありあをかめ
 思子乃友達共あらあるちやふむぢる哭を

さういふあれどいふまじく人々更らぬあはぬ
 あるお世うへおのちをまゐり女夫があがたてあり
 あはなをそき出さぬあつたつて死せる人も
 まゐりおこひをせられなとち乃姉妹思子
 近薦めおのけき女夫のあぢとよの諫や
 あゝとありおなとふせ人の思子ききある
 かのあや考へたりてあやひつてとちやあ
 遠子思ひまらんやと尋さぬおのけきと

[illegible][illegible]

いふ事ある。いふ事ある。極楽世界へ往けとせ。死
あじふとゆふ七つなり。もやまもなはたし
形がれや。ありあり。其回奉ふ見たり
死者の魂をまじひけり。極楽なり。極楽なり
一日二日ある。地獄を送る。ぬめぬめなり。死
に配する罪人なり。日く。子地獄のまげく。死
より眼鬼。鼻鬼。常明。鎖つ。ふり。のま。そ。ま
ぬ。と。あり。た。づ。ふ。ふ。日。ふ。回。見。子。身。ふ

焚苦をうけり。あり。あ。ひ。ふ。お。あ。い。乃。情。と。あ
び。と。罪。あ。せ。が。ぬ。み。を。あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を
の。ま。あ。ひ。佛。果。を。は。る。と。も。あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を
哭。と。あ。ひ。止。ま。り。あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を
あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を
あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を
役。目。あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を
あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を。あ。ひ。の。み。を

あねや^{また} 直^{ただ}おつらうりそききぞうくら
まゝいさうし^い 悲^{かな}しーふんやゆぐは来悲^{きたかな}
らとあれとあり子懸ふか玉ば看^み
^{こやし} 夫^{こや} 這^{あがり}也^{くまうろ} 難^{がた}右^{みぎ}の告^{つげ}ふちるよふふあれ
らとも并^{なみ}い^い膏^{こう}使^{つか}を想^{おも}ひぬぐせろ 夕^{ゆふ}はを
まむち^{まむち}勢^{せい}ひをけりとほ来^{きた}に必^{かならず}至^{いた}ると哭^{なく}と止^{とど}め
せられ佛^{ほとけ}も仇^{なり}者のこころをゆるし給^{たま}へ
はづてーさるるわるるまじくは世^よ屋^やう

う越さるゝし沸ぬ人ありと優に重國王
 えうゝとある一ふれ世すまたら何を
 うまあてせうゆれと夜もくゝ更時ぞえ
 晴らそ唇むなれやうとあー口額ふ
 動静よく酒あてめくらへ安んじたるゆれど
 あまありひさればせめんるま業あいまのめ
 めんとくお夫展嘆びけり抑くゝ雲々我
 とくのあつ七日前乃ゝ先子出佛へ使へり



[illegible][illegible]

[illegible]

いゝ慰めおせしめてやうおつた品々
おかげめおめでた
志乃こころ休やすみあふれ
身みとこころいゝおめでた

盲人要訣退治話

今多きう陸奥新の里に伊達ある
侍ある者あり一日にたつものある田
へ少少なりり其者の頃よりをたつて
と杖をぬりて子とてをたつては
國をたつていりてたつては
田をたつていりてたつては
想ひたかたなりとてたつては

かたつては細たなをたつては
まじりては伊達ある
りたなをたつては
子とては
侍ある者あり一日にたつものある田
へ少少なりり其者の頃よりをたつて
と杖をぬりて子とてをたつては
國をたつていりてたつては
田をたつていりてたつては
想ひたかたなりとてたつては

ほろ子沙を借少くうう深き谷へお
世刀み小尾をさうて候子橋を越すと
物と世子候あるやういゆせ橋のやまを
川をぬきの堀をさへと已が尾をさ刀の鞘
やうにさへて置かへて伊達おまはさる
物とさへて置かへてせうと放躍物と
尾刀の鞘とさうとさうと静路
いさかふたを橋を動かためうと怖

おぼろやとて侍の刀のや摩り
いのと候と提身おきる物いえと青の
ちうとちうと子綿跟とぬけとやあ
りんちや育人顔てちへとたはさる
おぼろやとて提身おきる物いえと青の
ちうとちうと刀の鞘とさうと
ちうとちうと刀の鞘とさうと
ちうとちうと刀の鞘とさうと
ちうとちうと刀の鞘とさうと



しりしり
 速莫^{すみ}もくもく
 あらうて腹を刀をさぐり斬く流く
 きき土もやまのや實^{じつ}知^ちて鞠^{まり}を提^ひく
 うゝあふ法^{はふ}斬^{ころ}あふゝを考へ切^き修^{しゆ}ぬ
 斬る人をもつゝ鬼^{おに}ありと云ふや
 思^{おも}ふ所^{ところ}あれと毫^こも走^{はし}りて捕^{とら}えぬや
 お金^{かね}ややけな揚^{たか}げにや
 伊達^{いだ}が揚^{たか}を海^{うみ}に投^なげるもの

[illegible]

思ふにさうなつて一せむき一せむき
 困事柄ハ素人のいふえんたうも難い
 かん後私ハ何と云ふもさういふ
 せうと云ふのれくの人みかへり

作者
 鬼武著述

都良香

都の宿祿良香ハ文章の博士
 中て菅丞相の師範ありて
 月余中て飛騨門のあとさる
 やて侍とわいてかくきき
 凡指新柳髪沐浴て波洗田草
 賢とて時鬼あつて持ふ
 と歎くころ又ハ別作中余
 遊る月三十世界眼中益との有
 と申していまこころを
 吟按す形ハ神と扱て
 十二回縁心裏室一や持
 其文章の鬼神と動する
 一其文章の鬼神と動する
 知る官を著て山中ハ



